

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一14:14～19 「ほかの人を教えるために」

[14]「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです」
パウロは、もし私が異言、すなわち誰にも理解できない恍惚としたことば、音声で神に向って祈っても、それは私の霊魂において祈ることになっても、理性的な面では全くわけのわからないさえずりであり、たわごとであり、理解し、納得し、同意するという知的な実を結ぶことはできないと言う。

[15]「ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう」

霊と知性とは車の両輪のようなもので、それが固く結ばれて初めて全人格的な祈りができる。人間は霊的な存在であるとともに知性的な存在でもある。そして、ここに言われているように、「祈り」と「賛美」が初代教会の礼拝において重要な要素であったことがわかる。教会の礼拝においては全人格的な行為として祈りと賛美が神にささげられ、しかもそれが独りよがりではなく他の人にも理解できるものでなければならない。

[16-17]「そうでないと、あなたが霊において祝福しても、異言を知らない人々の座席についている人は、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。あなたの感謝は結構ですが、他の人の徳を高めることはできません」

礼拝の目的は、ともに集まる人々が心を一にし、声を合わせて主イエス・キリストの父なる神をほめたたえることである。それゆえ、その礼拝で誰かが異言を語り、霊において祝福し感謝しても、それが知性においてもなされないならば、異言のわからない普通の人々、特に信仰に入って間もない人々や求道者たちは心を一にしてアーメンと言い、神をほめたたえることはできず、また他の人の徳を高めることもできない。

[18-19]「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが、教会では、異言で一万語話すよりは、ほかの人を教えるために、私の知性を用いて五つのことばを話したいのです」

パウロは異言を話せる人々へのねたみから、異言の問題を取り扱っているのだとコリント人たちは思うかもしれない。しかし、彼はコリント人の誰よりも多くの異言を話すことができると言う。確かに彼は復活のキリストに出会い、また第三の天まで引き上げられるという特別な体験をしている。→第二コリント12:1~4 彼ほど豊かな賜物を与えられている人はいないかもしれない。しかし、彼は教会の徳を高め、みな益とならないならばそれらを用いないのである。教会で異言で滔々としゃべったとしても誰も理解できず徳も高められない。それよりもたった五つのことばでもよい、ほかの人に教えるために、私の知性を用いて人にわかることばを話したいのだとパウロは言う。私たちも異言の問題からも教えられるように、聞く人にとって無意味、無内容なことばではなく、人を教えることのできることを知性をもって語り、教会の徳を高めていかなければならない。